Kyogei Presents

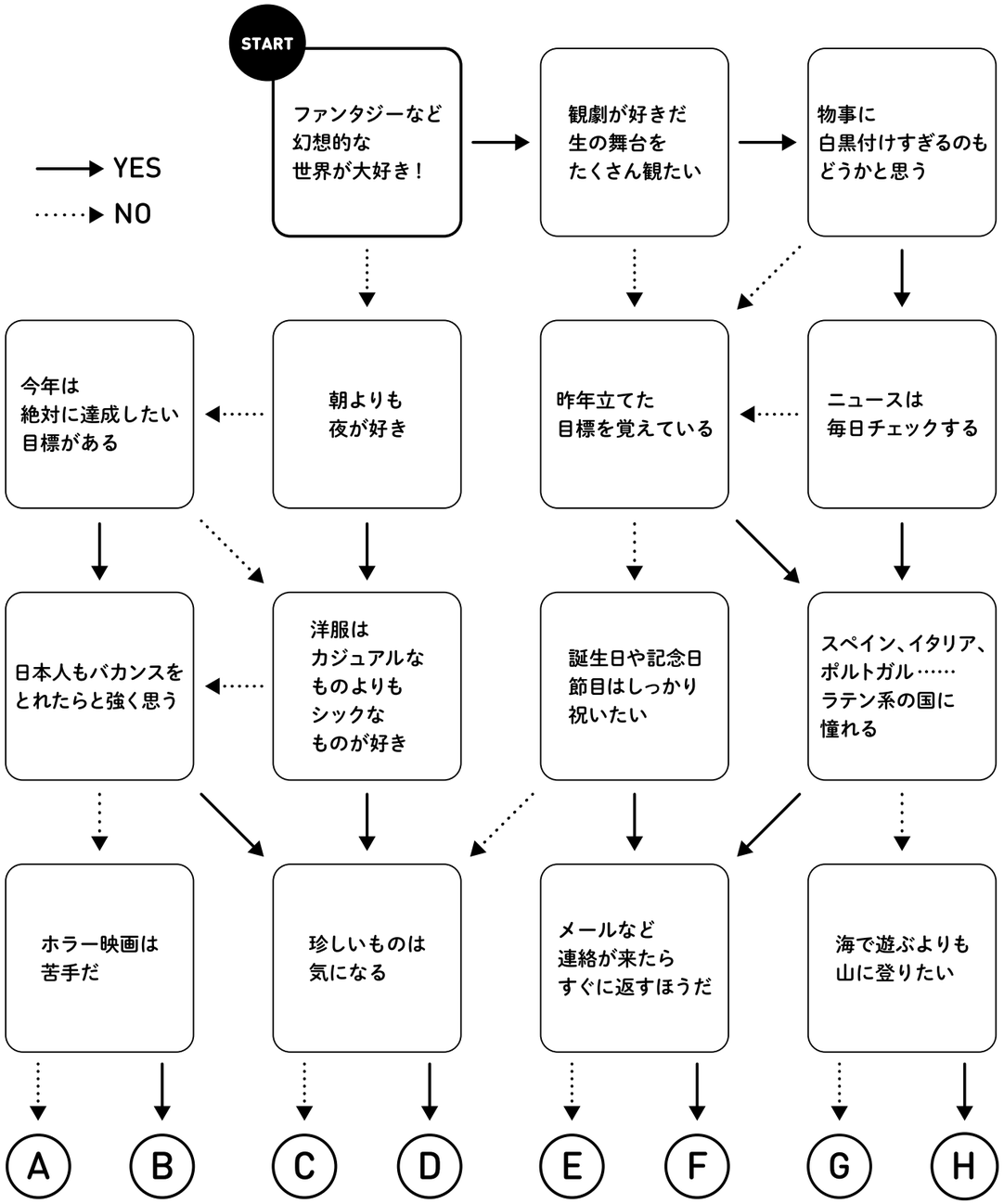
音楽診断

第７回

今年のおすすめ名曲編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第７弾。
今回は７つの名曲から、今年のあなたにおすすめの作品をご紹介します。

監修・解説＝山田治生
Text＝Haruo Yamada



あなたへのおすすめは？

Ⓐ 短調の美しい人気曲
モーツァルト『交響曲第40番』
（作曲年：1788年*／ウィーン）

40曲以上あるモーツァルトの交響曲の中で、たった2曲しかない短調の作品の一つ（もう一つは第25番）。とりわけ、悲哀を帯びた第１楽章の旋律は誰もが耳にしたことがあるだろう（ポピュラーにも編曲されている）。1788年の夏、モーツァルトは、彼にとって最後の交響曲の創作となった、第39番、第40番、第41番の３つの交響曲を一気に作曲した。多くの人々を魅了し続けてきた第１楽章だけでなく、第４楽章フィナーレでも哀しみが駆け抜けていく。

＊正確な初演年は不明

Ⓑ 苦しみを乗り越えた喜びを！歴史的作品
ベートーヴェン『交響曲第９番』
（初演：1824年／ウィーン、ケルントナートーア劇場）

ベートーヴェンの交響曲第９番は「第九」として、今や日本の年末の風物詩となっている。第４楽章のメロディーが「歓喜の歌」として有名であるが、全曲は、苦悩や闘争を経て歓喜に至るというストーリー性をもつ。特にゆったりとした第３楽章が感動的。シラーの詩とともに人類愛が歌われるこの作品は、ベートーヴェンでは唯一の合唱付きの交響曲。後のマーラーらの交響曲に大きな影響を与えた。また、初演（1824年）当時、１時間を超える交響曲は前代未聞だった。

Ⓒ 心に寄り添う感動的な音楽
チャイコフスキー『交響曲第６番《悲愴》』
（初演：1893年／サンクトペテルブルク）

交響曲第６番「悲愴」は、チャイコフスキーにとっての最後の交響曲である。この交響曲の第４楽章からは、作曲者の死への意識が強く感じられる。悲哀に満ちた冒頭部分のあと、中間部は“祈り”のような感動的な音楽となる。その後、銅鑼が鳴り、葬送を象徴するトロンボーンの合奏。最後のコントラバスのリズムは弱まっていく鼓動だろうか。「悲愴」は、ベートーヴェン型の「苦悩を経て歓喜」とは逆の、悲しみのアダージョで終わる交響曲の先駆けとなった。

Ⓓ 伝統的スタイルで書かれた最高傑作
ブラームス『交響曲第４番』
（初演：1885年／ドイツ テューリンゲン、マイニンゲン宮廷劇場）

ブラームスの最後の交響曲である第４番は、50歳を超えた作曲者の情熱と諦観が円熟の筆致で描かれた傑作である。ブラームスは、リストやワーグナーなどの大掛かりな音楽がもてはやされた後期ロマン派の時代において、伝統的で懐古的な創作のスタンスをとり続けた。それでも交響曲第４番では、第４楽章にシャコンヌの形式を用いたり、彼の交響曲のなかでは唯一、短調で終わるなどの試みもした。第１楽章冒頭でヴァイオリンが奏でる憂愁を帯びた第１主題が印象的。

Ⓔ 明るく迫力満点！交響詩三部作の最終作
レスピーギ『ローマの祭』
（初演：1929年／アメリカ、ニューヨーク）

交響詩『ローマの祭』は、イタリアの作曲家、レスピーギの「ローマ三部作」の最後の作品（他の２つは『ローマの噴水』と『ローマの松』）。「チルチェンセス」、「五十年祭」、「十月祭」、「主顕祭」というローマの４つの祭が描かれる。古代ローマの獰猛で残虐な祭で始まり、最後は民衆たちのお祭り騒ぎに至る。別働のトランペット隊やオルガン、マンドリンを要する巨大編成のオーケストラが、色彩豊かで迫力満点の音楽を繰り広げる。

Ⓕ 優しく語りかける童話の世界
ラヴェル『マ・メール・ロワ』
（初演：1910年／パリ、ガヴォーホール）

『マ・メール・ロワ』は、フランスの作曲家、ラヴェルが友人の子どもたちのために書いた組曲。フランス語の「マ・メール・ロワ」は、英語の「マザー・グース」に当たる。ラヴェルは、このタイトルをシャルル・ペローの童話集の名前からとった。オリジナルはピアノ連弾のための組曲だが、作曲家自身の編曲による管弦楽版と、前奏曲や新たなシーンを加えたバレエ音楽版も存在する。とりわけ、眠りの森の美女の目覚めが描かれる第５曲「妖精の園」が感動的。

Ⓖ 凄絶なストーリーの有名オペラ
リヒャルト・シュトラウス『サロメ』
（初演：1905年／ドイツ ドレスデン、ゼンパー・オーパー）

ドイツ出身のR.シュトラウスは、交響詩やオペラに数多くの名作を残した。『サロメ』はオスカー・ワイルドの戯曲に基づくオペラ。サロメは、義父ヘロデに、幽閉中の預言者ヨカナーンの首を所望し、自らの踊りと引き換えにヨカナーンの首を得る。サロメが１枚ずつ衣を脱ぎ捨て全裸になる官能的な〈７つのヴェールの踊り〉が、オーケストラ作品として聴きもの。オペラの終盤、ヨカナーンの首を得たサロメがその唇にキスをするモノローグが凄絶を極める。

Ⓗ オペラ界の革命家が全てを手掛けた大曲
ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』
（初演：1865年／ミュンヘン、バイエルン宮廷歌劇場）

ワーグナーは、作曲だけでなく、自ら台本を書き、指揮を執り、演出を手掛け、音楽祭まで創設した、オペラ界の革命家。『トリスタンとイゾルデ』はそんな彼の代表作。休憩時間を入れない正味の上演時間が４時間に及ぶ大作。媚薬によって、トリスタンとマルケ王の妻イゾルデとは不倫の仲になる。第２幕のロマンティックで濃厚な愛の二重唱が聴きどころ。前奏曲と最後の「イゾルデの愛の死」は単独でもしばしば演奏される名曲。

山田治生（音楽評論家）
1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の愉しみ方』（以上、アルファベータ）、編著書に『戦後のオペラ』（新国立劇場情報センター）、訳書に『レナード・バーンスタイン　ザ・ラスト・ロング・インタビュー』（アルファベータ）などがある。

イラストレーション：こばやしみさこ